

令和5年1月23日

松阪市議会

議長 山 本 芳 敬 様

議会運営委員会

委員長 堀 端 脩

行政視察報告書

標記の件について、下記のとおり行政視察を行いましたので、その内容等を報告します。

記

1. 視察の日程 令和5年1月12日（木）～1月13日（金）
2. 視察先 静岡県御殿場市 ／愛知県半田市
3. 議会運営委員会
4. 参加委員 堀端 脩（委員長）、深田 龍（副委員長）、橘 大介（委員）、
中村 誠（委員）、田中 正浩（委員）、松岡 恒雄（委員）、
坂口 秀夫（委員）、濱口 高志（委員）、中島 清晴（委員）
5. 報告書作成 深田 龍、田中 正浩
6. 報告書提出 委員長 堀端 脩
7. 視察項目

（1）静岡県御殿場市 1月12日（木）

議会改革の取り組みについて（若者プロジェクトについて）

（2）愛知県半田市 1月13日（金）

議会改革の取り組みについて（電子採決について、議員間討議（自由討議）について）

御殿場市行政視察

日時:	令和 5 年 1 月 12 日(木曜日) 14:00 ~ 15:30
会場:	御殿場市議会
テーマ:	議会改革の取り組みについて～若者プロジェクトについて～
出席者:	御殿場市議会 議会改革特別委員会 委員長 高橋利典様 副委員長 土屋光行様 議会事務局 事務局長 芹沢節巳様 松阪市議会 議会運営委員会 委員長 堀端脩、副委員長 深田龍、 橘大介、中村誠、田中正浩、松岡恒雄、坂口秀夫、濱口高志、中島清晴
内容:	■未来議会プロジェクト(旧若者プロジェクト)に取り組むに至った経緯 明治大学とパートナーシップを結び、アドバイスをしてもらいながら議会改革に取り組んでいる → 政治倫理条例の制定、議会 BCP の策定、議員報酬等の特例に関する条例を制定など 令和 4 年 3 月に議会改革特別委員会を設置 ・政策立案能力の醸成 ・反問権についての研究 ・未来議会プロジェクト の3つに取り組んでいくことを決定 (未来議会プロジェクトについては令和 2 年度からの継続事業) 平成 29 年の選挙が無投票になったことも理由のひとつ。 令和 2・3 年度は議運で高校生議会など交流事業を実施。 また、御殿場市議会政治塾を開催 令和 4 年度以降は、議会改革が担当することに決定。 ■未来議会プロジェクトと政治塾の目的 若年層や子育て世代の方々に対し、議会や姿勢に関心を持ってもらう。 開かれた議会を目指し、議員のなり手不足の解消等に向け中長期的な視点に立ち、事業展開を図っていくこと。 【未来議会プロジェクト】 令和 2 年度 御殿場西高校 23 人と交流事業(見学会、意見交換会など) 令和 3 年度 御殿場高校の生徒 14 人と交流事業 令和 4 年度 御殿場南高校の生徒 10 人と交流事業

【政治塾】

令和 4 年 1 月：市民 11 人が参加

令和 4 年 11 月：市民 6 人が参加

【その他】

明治大学・大月短期大学 37 人と交流事業

議員による大学講義(令和 4 年 1 月、令和 5 年 1 月)



【松阪市議会からの質問】

・明治大学での講義について、どんな内容をされたのか？

→ 180 分の授業。大学からはなんでもいいよと言われていた。なぜ議員になったのかや議員活動での苦労話を学生に話をした。議員 3 名が講和。事務局からも議会の概要の話や市役所の仕事について話をした。

・政治塾について、令和 4 年に実施されているが、令和 2 年の選挙は候補者が一定数いたかと思う。それでも塾を行う意義は？また参加した方の年代層は？

→ 女性議員が 2 名で少ない。若い議員も少ない。当時、先回の選挙が無投票だったため、無投票を 2 回続けられない想いもあった。若い人は増えたが、女性の立候補者は少なかった。意見交換の中で、この人は出るだろうなとわかる人がいたのは収穫だった。

・報酬を上げた背景や委員長手当などをつけた理由は？

→ 議員報酬については報酬審議会に諮問をして、その中で出てきたご意見だった。多くの意見は、定数を減らして報酬を上げるという認識を持った方が多かった。若い議員には生活保障も必要だが、なかなか市民に理解がえられない懸念はあった。だから、3,000 円ほど上がったただけだった。

・高校生を対象にした理由は？

	→ 中学生という発想がなかったため、最初から高校生をターゲットにした。議員の中からも、中学生という発言は当時もなかった。 学校で政治的なものをどこまでしていいのか、学校に相談したが、どんどんとやってもらいたいという前向きな発言を聞くことができた。目の前に投票がせまっている世代。 ・高校生又は高校との準備や調整は大変かと想像するが、どのように対応をされているのか？ → あまり構えない方がいいのかもしれない。事前の準備や調整をここ2回の意見交換会では一切していない。それをする、お互いの負担にもなるし、会自体が続かない印象を受ける。 ・政治塾について詳しくきかせて欲しい。 → 議員をしているの達成感や選挙費用の詳細など、準備すべきことを伝えている。 ・明治大学とのコネクションはあったのか？どのような意見をもらっているのか？ → 執行部側の付き合いの中で、明治大学へ依頼した。費用は議員も負担をして、パートナーシップを結んだ。議員発議の条例を作っていきたいという想いが根底にある。基本、年数回の講義をしてもらう。講義内容は議会から要望できるようにしている。
所感：	平成29年の改選時に9万人規模の人口都市で無投票になったことが大きく作用し、将来の御殿場市議会のあり方を心配されて、将来の担い手づくりを率先して、主体的に取り組んでいる「未来議会プロジェクト」であることがわかった。松阪市議会ではまだターゲティングしたことがない年代層である若者や子育て世代を対象に、議会や議員の活動や選挙のことまで情報共有をしたり、意見交換の場をつくったりした取り組みの結果として、若い年代層の立候補者が増えたという実績を聞くことができた。 待っていても市民やまちの課題解消にはつながらない。改めて、議会の主体的な活動が政策や問題解決へとつながる第一歩だと感じる事ができた。

Ⅱ．愛知県半田市行政視察

1．半田市の概要

（１）人口 114,737人、49,332世帯（令和5年1月）

（２）面積 384km²

（３）概要

半田市は、名古屋市の南、中部国際空港の東側にあり、知多半島の中央部東側に位置しています。市として昭和12年に誕生しました。半田は古くから海運業、醸造業（味噌酢）などで栄え、知多地域の政治・経済・文化の中心都市として発展してきました。

半田の特徴は「山車」・「蔵」・「南吉」・「赤レンガ」です。

山車祭りの歴史は古く、300年余りの歴史があり、その伝統や文化を現代に受け継いでいます。春に曳き廻される山車は、精緻を極めた華麗な刺繍幕、精巧なからくり人形などが備えられ、その壮観な姿は「はんだびと」のほこりです。中でも「亀崎潮千祭の山車行事」は、ユネスコ無形文化遺産に登録され、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。また5年に一度、各地区の山車31輦が勢ぞろいする「はんだ山車まつり」は50万人もの観客が訪れます。

半田運河は日本三大運河に数えられ、運河沿いには醸造業に代表される黒板囲いの醸造蔵が今も残っており、当時の風情を今に伝えています。小学校の教科書でもおなじみの童話「ごんぎつね」。作者の新美南吉は、半田に生まれ育ち、郷土を愛した作家で彼の描いた物語には、ふるさとの豊かな自然、その中で生きる人々の思いやりややさしさがあふれています。「ごんぎつね」に登場する矢勝川沿いの堤には、毎年300万本を超す彼岸花が咲き誇ります。

半田赤レンガ建物は明治31年にビール工場として誕生し、当時は大都市の4大ビールメーカーが独占していましたが地方都市から果敢に挑戦し、パリ万博でビール部門での金賞を受賞した半田の先人たちの心意気を感じられます。また現存するレンガ作りの建物として最大級の規模を誇り、国の登録有形文化財、経済産業省の近代化産業遺産に認定されています。

半田市は、平成20年5月に景観行政団体となり、半田運河や矢勝川周辺の景観を保存し、山車まつりの文化や半田赤レンガ建物にふさわしい景観づくりなど、地域の特性を活かした景観形成を推進する活気あふれたまちです。交通の便もよく誰もが住みたくなる街です。

2. 出席者

○半田市議会

市議会議長	鈴木 幸彦
市議会副議長	山本 半治
議会運営委員会委員長	沢田 清
議会運営委員会副委員長	渡邊 昭司
議事課課長	新美 恭子
議事課	石原 義士

○松阪市議会 議会運営委員会

堀端 脩（委員長）、深田 龍（副委員長）、橘 大介（委員）、
中村 誠（委員）、田中 正浩（委員）、松岡 恒雄（委員）、
坂口 秀夫（委員）、濱口 高志（委員）、中島 清晴（委員）



（半田市議会議場にて電子採決の説明）

3. 視察研修事項 「議会改革について」

この視察研修に先立ち半田市議会に「議会改革について」の5項目の行政視察質問書を送り、それについて説明をしていただいた。

(1) 電子採決を導入するに至った経緯について

質問書を送り【ICT化の目的】、【目指す姿】、【必要なこと】の3点を半田市議会事務局から説明を受けた。

【ICT化の目的】

令和元年度、議会運営委員会において、半田市議会の議会 ICT 化を検討する作業部会「ICT 化推進プロジェクト」を立ち上げ、「半田市議会の ICT 化とは何か」という点から議論が始まりました。その作業部会で議会 ICT 化の目的は「開かれた議会の推進」と考えました。

議会は、市民の選んだ代表で構成されている。だから常に市民に近い存在でなければならない。そのためには市民の声を聴く機会を大切にしなければならない。

また議会の議論を市民に「伝える」を大切にしなければならない。

議会と市民の双方向の情報交換が活発に行われる状態を「開かれた議会」と位置付けている。よって市民の議会に対する関心を高めることを ICT 化の目的とした。

【目指す姿】

これまでの「開かれた議会」の取り組みは議会だよりの改革や賛否の掲載、おでかけ委員会の導入、議会報告会の実施、YouTube での動画配信、「Q イズ！GIKAI へ GO！！」の開催、高校生・大学生との意見交換会など行ってきたが投票率の低下、傍聴者の固定化、議会報告会の参加者の固定化などを行ってきたが課題解決には至っていなかった。

半田市議会が ICT 化で目指す「開かれた議会」にするためには議員が正しく理解し、市民に情報提供できる状況を目指し、そして多角的な情報を市民に伝えることが必要であると考えた。

【必要なこと】

開かれた議会を目指すためには「広報・広聴機能の強化」である。

そのためには多角的な情報発信で幅広い市民層に「伝える」ことが必要であり「伝える」ために必要な条件は、内容が正確であることと情報量が豊富であることが必要なことが必要。

以上の結果を踏まえ、直近で実施することになったのが、

① 情報端末の導入 ②電子採決の導入 ③インターネットによる本会議のライブ配信 であった。

(2) 実際に電子採決システムを実施してみて、効果と課題など

【効果】

- ① 議長席から議員の評決態度が見えにくかった状態が改善された。
- ② 傍聴者、ライブ中継視聴者は画面に表示された採決結果を見ることが各議員の表決態度を明確にできる。
- ③ 表決時のバリアフリー化が進んだ。

【課題】

現在、採決時に賛成/反対ボタンを押さなかった議員は「棄権」との運用が十分に議論されていない部分があり、今後、改善の余地がある。

(3) 議員間討議（自由討議）の進め方

開かれた議会を目指し、議会の活性化と機能の充実に図るために、議会活動の基本となる条例が必要と考え、平成20年度から、議会運営委員会等で本格的な調査研究を開始した。

1. 平成23年3月29日に半田市議会基本条例を制定した。
その基本条例第十三条に議会は、議事機関として、その意思決定に当たっては、議員間の公平で自由な議論を尽くすものとする。
2. 議会は、原則として委員会活動を中心に議員間討議を行うものとする。

半田市議会基本条例に自由討議の原則を規定したが、制度として運用が確立しているものではなく、議員間討議の内容や時間、回数などの定めはない。

(4) 議員間討議（自由討議）が行われた審査内容

議員間討議が行われた審査内容ですが公式の記録は残っていない。

委員会における議員間討議として、休憩を入れて議員間討議を行った例がある。

議員総会における議員間討議は賛否が拮抗するような議案や修正案を提出するような議案などは議員だけで修正討論を行うことがあった。

議員総会は全議員での話し合いの場として、行政課題に関する意見交換や政務活動費による視察報告などを行っている。

(5) 議員間討議（自由討議）が行われた際のその後の取り扱い
（本会議での委員長報告の対応など）

委員会の議案審査で議員間討議が行われた場合には、非公式の話し合いであるため、委員長報告に載せることはしない。委員長報告に載せる必要がある場合には、委員会開催中に同様の内容を発信し直すことになると思われる。

4. 所感

半田市議会を視察研修させていただき素晴らしい点を何点か勉強させていただきした。松阪市議会もサイドブックを採用し、タブレット端末も各議員への配布が終わり、ハード機器だけを見ればいつでも電子採決に入れる状況になっております。しかし、まず議会規則の整理や採決時に賛成・反対のボタンを押さなかった議員は「棄権」扱いとする点など、「棄権」の運用を十分に議論する必要を感じました。

議員として賛成、反対の表決をボタンで良いのかなども考えさせられる案件です。

またメリットは、議会ライブ中継でどの議員が賛成か反対かなどリアルタイムで見ている視聴者にとっては面白いと思いますが、議場での傍聴者にはモニター画面が小さすぎて確認できないなど、いろいろな問題点もお聞きしました。

しかし、議会の ICT 化の中で、必ず通過する問題であることは理解しております。

電子採決システムは通過点であり、松阪市議会も開かれた議会の推進の為、議員が正しく理解して、市民に情報提供できる状況をつくる一つのツールとして電子採決の導入は必要であると思います。

また身体障害者の方が議員になられた場合にも、バリアフリー化の手段として早期の採用を考えた方が良いように思います。いろいろな問題点が出ましたが、全議員にも問題提起してそれらを整理し、電子採決システムの採用方向に向かうべきと考えます。